

## 樺太からの手紙(20世紀の仏教文学)

沼野充義先生と亀山郁夫先生の対談『ロシア革命100年の謎』(河出書房新社)を読んでいると、チェーホフの1890年の樺太旅行についての話題が出てきた。いつもながら熱をこめて語る亀山先生と、いつもながら冷静にそれに応える沼野先生との議論が大変興味深かったが……私は樺太に旅した文豪というつながりから、さらに我が国の文豪に連想が及びました。それはつまり宮沢賢治のことで、彼もまた樺太に旅行し、人生の転機を迎えたのだった。

賢治は最愛の妹トシが亡くなった翌年(1923年)、樺太へ傷心旅行にでかけた。チェーホフに遅れること三十数年後のことである。そして帰ってくると、今度は奇行に走った。匿名の怪文書を印刷し、家々の郵便受けや学校の下駄箱に、無作為に放り込んで回ったのだという。そのうちの一枚には、こんな文が刷られていた。

わたくしはあるひとから云いつけられて、この手紙を印刷してあなたがたにおわたしします。どなたか、ポーセがほんとうにどうなったか、知っているかたはありませんか。

……ポーセはチュンセの小さな妹ですが、……十一月ころ、俄かに病気になったのです。……チュンセは松の木の枝から雨雪を両手にいっぱいにとって来ました。それからポーセの枕もとに行って皿にそれを置き、さじでポーセにたべさせました。ポーセはおいしそうに三さじばかり喰べましたら急にぐたっとなつていきをつかなくなりました。

……それから春になって……チュンセはキャベジの床をつくっていました。そして土の中から一  
びきのうすい緑いろの小さな蛙がよろよろと這って出て来ました。「かえるなんぞ、潰れちまえ。」  
チュンセは大きな稜石でいきなりそれを叩きました。それからひるすぎ、枯れ草の中でチュンセが  
とろとろやすんでいましたら、いつかチュンセはぼおっと黄いろな野原のようなところを歩いて行  
くようにおもいました。すると向うにポーセがしもやけのある小さな手で眼をこすりながら立っ  
てぼんやりチュンセに云いました。「兄さんなぜあたいの青いおべべ裂いたの。」チュンセはびっ  
くりしてはね起きて一生けん命そこらをさがしたり考えたりしてみましたがなんにもわからないの  
です。

どなたかポーセを知っているかたはないでしょうか。けれども私にこの手紙を云いつけたひとが  
云っていました「チュンセはポーセをたずねることはむだだ。なぜならどんなことでも、また、  
はたけではたらいっているひとでも、汽車の中で苹果をたべているひとでも、また歌う鳥や歌わない  
鳥、青や黒やのあらゆる魚、あらゆる虫も、みんな、みんな、むかしからのお  
たがいのきょうだいなのだから。チュンセがもしもポーセをほんとうにかあいそうにおもうなら大  
きな勇氣を出してすべてのいきもののほんとうの幸福をさがさなければいけない。それはナムサダ  
ルマップンダリカサストラというものである……」それからこのひとはまた云いました。「チュ  
ンセはいいこどもだ。さアおまえはチュンセやポーセやみんなのために、ポーセをたずねる手紙を  
出すがらう。」そこで私はいまこれをあなたに送るのです。

チュンセとポーセの名は、代表作「双子の星」の主人公ふたりと同じだけれど、名前以外に共通点はない。むしろ、賢治自身とその妹トシを……作者と作品を切り離すべしという、文芸批評の鉄則も忘れて……チュンセとポーセには重ねてしまう。賢治がトシの臨終にさいして、庭の雨雪を末期の水として食べさせたという、名詩「永訣の朝」にも詠まれた逸話をなぞっているからだ。

ところで、上に引いた文の「なぜならどんなことでも、また、はたけではたらいっているひとでも、汽車の中で苹果をたべているひとでも、また歌う鳥や歌わない鳥、青や黒やのあらゆる魚、あらゆるけものも、あらゆる虫も、みんな、みんな、むかしからのおたがいのきょうだいなのだから。」との一節が、浄土真宗の開祖・親鸞の『歎異抄』の中の「一切の有情は、皆もて世世・生生の父母兄弟なり」という一節に共通する、との指摘がある（芹沢俊介「家族にとつて、宗教とは」『現代と親鸞』8、2005年）。賢治は熱心な浄土真宗の家に生まれ、十六歳の時には『歎異抄』を「小生の全信仰と致し候」との言葉を書き残している。それを思えば、確かに説得力のある論ではある。

しかし気になるのは、本当に親鸞の『歎異抄』を引いたのならば、なぜ「ナムアミダブツ」（南無阿彌陀仏）に着地せず、「ナムサダルマフンダリカサストラ」と結んでいるのか。この句は「ナム（南無）サダルマ（妙法）フンダリカサ（蓮華）ストラ（経）」という梵語、つまり「南無妙法蓮華経」なのだ。

じつは「なぜならどんなことでも……みんな、みんな、むかしからのおたがいのきょうだいなのだから」という教えは『歎異抄』の専売特許ではなく、それこそ「むかしから」語り継がれてきたブツダの言葉である。なんとすれば『歎異抄』の「一切の有情は、皆もて世世・生生の父母兄弟なり」と

いうくだんの一節にしても親鸞の独創ではなく、元々『心地観経』というお経から引っぱってきたものだし、そして『心地観経』からは問題の『妙法蓮華経』へ廻れる。

『妙法蓮華経』は「一念三千」という教理を含んでいる。これは我々胸中のちっぽけな心（一念）のうちに、あらゆる存在が「みんな、みんな、むかしからのおたがいのきょうだい」として繋がっているながら形成された三千世界が包み込まれている……という一種の観心論である。チュンセ胸中の夢の中に、蛙となったポーセとの再会が……つまり、あらゆる存在のおたがいの繋がりが暗示されたのは、まさに垣間見えた「一念三千」だったのではなからうか。

しかし、一念三千の教えは秘中の秘とされ、普通の平凡な人間には理解できないともいわれる。だから「チュンセはびっくりしてはね起きて一生けん命そこらをさがしたり考えたりしてみましたがなんにもわからない」のである。

そこで、一念三千の秘儀をブツダは『妙法蓮華経』の中に説いて、つまりは「妙法蓮華経」の五文字にこめて、人々に授けた。これが「南無妙法蓮華経」であると日蓮は述べた（「一念三千を知らざる者には、仏、大慈悲を起して五字の内にこの珠を包み、末代幼稚の首に懸けさしめたもう」『観心本尊抄』）。そこで「この手紙を云いつけたひと」は「ナムサダルマプンダリカサストラ」の一言を残したのだろう。

熱心な浄土真宗の家に生まれ、十六歳の時には『歎異抄』を「小生の全信仰と致し候」との言葉を書き残した賢治だったが、それから二年経った十八歳の時には『妙法蓮華経』に転向している。爾来、彼は熱心な法華信者として多くの作品を遺し、その名を今日に留めているのだが、その『歎異抄』か

ら『妙法蓮華經』への回心と再生の道のり……それは単なる宗教信条だけの問題ではなくて、もっと大きな意味での回心と再生の道のりが、樺太旅行の土産として刷られた手紙の上に、轍として刻まれているのだろうか。

岡田文弘